特輯 日本の詩学に向けて

[巻頭言] キャノン再考と比較文学……………………井上 健（1）

近世の地名——「掛詞の詩学」序説……………………川本 嘉嗣（4）
日本語の源流……………………………………………………山中 桂一（16）
「はかなき遊ばたはふれにつけても」
——歌ことばの詩化過程と掛詞 …………………ツベタナ・クリステワ（32）
「ことば」が「詩」になるとき
——尾形亀之介の詩作について………………………………エリス隆子（49）
デクノボの詩学

俳句と和歌発見の旅
——ポール＝ルイ・クーシュの自筆書簡をめぐって…柴田 依子（78）
f〈感情〉をF〈認識〉する垢石………………………………鈴木 敦子（97）

若き日の島田謙二先生——書誌の側面から（2）…………小林 信行（113）

[書 評]
「西洋の夢幻能——イェイツとパウンド」（成恵岡）…………持田 季未子（122）
「明治日本の詩と戦争——アジアの賢人と詩人」
（P-L.クーシュ著／金子美都子・柴田依子訳）……前島 志保（126）

Korean Literature in Cultural Context and Comparative
Perspective（Cho Dong-il）…………大澤 吉博（131）

[展覧会カタログ評]
「京都近代画壇と『西洋』」展 …………………………………内藤 高（136）
「岡倉天心とボストン美術館」展 …………………………………稲賀 嬉美（140）

「イリヤ・カバコフ展」
シャルル・ロゼンタールの人生と創造 ……………三浦 俊彦（144）

[Le Rond-Point]
比較文化論的考察について …………………………………小谷野 敦（149）
金原禮子氏博士論文「フォーレの歌曲とフランス近代の
詩人たち」審査結果の要旨 ……………川本 嘉嗣（155）
金原禮子氏博士論文審査委員会記録 ……………斎藤みどり（158）
クリステワ・ツベタナ氏博士論文「漢の詩学——王朝文
化の詩的言語」審査結果の要旨 ……………川本 嘉嗣（161）
クリステワ・ツベタナ氏博士論文公開審査委員会記録 ………永井久美子（163）

川本嘉嗣教授著作目録 ………………………………………（168）
布村弘氏遺稿集刊行のお知らせ ……………………………（175）
外国語要約

東大比較文学学会

カタログ評 岡倉天心とボストン美術館展 比較文学研究□号、□□□年、□□□□□頁
岡倉天心とボストン美術館展

名古屋ボストン美術館で、このほど岡倉天心とボストン美術館展が開催された。『東洋美術史』という枠組みの世界的認知に尽くした天心の、ボストン美術館における事業の実態、それをはじめ来、本展は、名古屋ボストン美術館の開設記念展覧会として、名古屋側の調査の必要、名古屋側の集客力への配慮や地元共催者の意向などから、『モネ展』が優先された。後藤を指した第二次企画展として、四国の準備期間の末に、いわば満待して実現に漕ぎ着けた。ボストン（本館）側としては、本展は名古屋ボストン美術館という受け皿なくしては実現しない企画だった。交流のはじめが、ここにある」とのボスターのキャッチフレーズは、天心の文化事情を指すとともに、名古屋とボストンとの交流のはじめをも記念する。

名古屋市立山の美術館会場での構成も、囲壁解説をともに、天心とフェルソナ、天心と日本美術院、天心の収集した日本美術、天心の収集した中国美術、および「中国・日本美術館」と「天心」という五部構成。学術的というよりは、むしろ公衆への案内、性格が強い平易で簡潔な文章だが、いずれも天心直筆書簡や当時
用の価値が高い、かつ多くの美術展覧会図録は、展示作品の版図を
載とその解説を終始しながら限界がある。だが蒐集集の歴史的現
場を復元し、従来の名品展との枠組みを越えるには、美術館の
領分である「作品」や「博物館」の掲「資料」を相互立組み合わせ
する工夫が必要だ。あるいは当然にみえるとした工夫は、実際に
心に実現できない恨みがある。今回も出品数の制限からか、天
術館が自らの歴史を回顧し批判的に再構築しようとする姿勢には、
従来の闕を乗り越えるようとする意欲的な取り組みがあり、将来に
わたる一歩の模範を示している。

また各章の解説から、論文、図解説に至るまで、全体を日本語
と米語の並列表記に占った点にも、言及したい。これは、実際には日本語での
出版は当然の見識であり、日米両館の共用企画であっても、紙幅のうえで大きな制約を受けているとはいえ、寄せられた四編の
論文は検討に値する。

中心となる論文は、本展企画のポスト東側の中心人物であった東
洋部副部長、ア・ニシハラ・モーチによる「正直派の主張」と
岡倉覚三とポスト美術館日本コレクション。岡倉がポスト美
術館東洋部に転向し、中国・日本部長へと昇進する時期は、ちょうど
と美術館が新館へと移転する途だった。モーチ氏論文は、がてポスト
の展示と一と展示の展覧会を「不適切」な判断を示していたことを教
える。そしてこの提案が、心の中の主張である、東洋の文物は
"東洋の観点からなされるべきとの立場と対立したことを示唆
し、結局フランソワ・ガルナー・カーティスが、歴史的展示は尊
重し、朝に沿う新展示を実現した、この解釈を提出している。この資料発
掘からは、なお背後の事実関係が十分に明らかではない。とまれ美
日本 storia della musica e della cultura per la seconda metà del secolo相爱
イリヤ・カバコフ（九三三）という芸術家のことでも知らなかった。もっともローゼンタールは、ラファエルの「救世主」を知らなかった。水戸芸術館で見つけたカバコフ、水戸芸術館、ジャン・マイヨー、マックス・ローゼンタールの作品展を記録したスケッチ、絵画、オブジェなどを「キュレーター」であるイリヤ・カバコフが取りまとめ企画した回顧展である。水戸芸術館で見つけた作品展である。